

国語科教材としての平野啓一郎の「分人」論

—— 高大接続を視野に入れた文学教育 (1) ——

広瀬正浩*

一、研究の背景と動機

一九九九年一二月に、「今後我が国の教育はいかにあるべきか、特に初等中等教育と高等教育の役割と接続の在り方はいかにあるべきかを検討する」^①ことを示した中央教育審議会の答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」^②が出された。それを機に、「高大接続」の推進が目指されてきた。「生涯の各時期にわたって、いつでも学習できるような環境や条件を整備するとともに、初等中等教育段階にあつては、知識の一方的な教え込みではなく「自ら学び、自ら考える力」の育成、高等教育段階にあつては、初等中等教育段階で身に付けられた「自ら学び、自ら考える力」^③を基礎として「課題探求能力」の育成を図ることが重要である」という認識の下、大学での学びを取り込んだ高等学校の教育カリキュラムが編成されたり、大学教員による高校生向けの出張授業や模擬授業が実施されたりしてきた。こうした教育環境面の整備は今後もさらに進められ

ていくであろうが、実際に「高校生に／大学生に、何をどう教えるか」という点に関しては、個々の教科・科目、個々の教員、個々の受講生の水準に応じて、あるいはそれぞれが置かれた時代や社会の状況の質に応じて、その都度考えられなければならない課題である。

さて、高等学校国語科に関しては、二〇一八年三月に新しい学習指導要領が告示された。これにより、必修教科目が「国語総合」(四単位)から、「現代の国語」(二単位)および「言語文化」(二単位)へと変わった。また、選択科目が「現代文A」(二単位)、「現代文B」(四単位)、「古典A」(二単位)、「古典B」(四単位)、「国語表現」(三単位)といったものから、「論理国語」(四単位)、「国語表現」(四単位)、「文学国語」(四単位)、「古典探求」(四単位)へと変わった。そしてこの新しいカリキュラムは、二〇二二年度入学生から施行されることとなった。その結果、この新しいカリキュラム編成において、四つある選択科目のうちのどの科目を選ぶのが適当であるのかが問われることとなった。

この科目選択の基準を大きく規定するものの一つが、大学入学試

験における出題傾向である。二〇二〇年度から、それまでの「大学入試センター試験」に代わって「大学入学共通テスト」が実施されることになり、それに伴って出題傾向も変わった。従来のセンター試験同様に評論文と小説、古文と漢文の四つをベースにしつつも、複数の問題文や資料を照らし合わせて論理的に読解したり思考を抽象化したりすることが、新たに求められるようになったのである。

こうした出題傾向の変化は、新しいカリキュラム編成の下での選択科目における「論理国語」と「古典探究」の選択を促すことになろう。そして結果的に、従来の「国語総合」や「現代文」に取り込まれていた文学的な文章を中心に扱う「文学国語」は、選択されにくいものとなった。実際に各出版社の教科書ラインナップを見ると、「論理国語」や「古典探究」などは「精選」と冠のついたものや無印のものなどバリエーションは豊かであるが、「文学国語」はバリエーションが乏しい。

大学では文系学部の縮小などといった文学を教える教育環境面での困難はあるが、文学そのものの価値が文学の授業者によって否定されることは、基本的にはないだろう。だが、高等学校において「文学国語」が選ばれにくいものとして存在しているという先述の状況は、「近現代の文学教材（詩・短歌・俳句をふくむ）の実質的な縮小であり、教室からの「排除³」として理解された。文学作品教材をめぐる高等学校と大学の関係は、不均衡なものであると言えるだろう。

このような不均衡を前提とすると、国語科における高大接続が有意義なものになるためには、①説明的な文章（評論文、論説文、「論理国語」などで扱われる文章）と文学的な文章との区別を相対化し、説明的な文章もまた「文学」であるとする論理を構築する、②文学

的な文章を論理的に読まれるべきものとして定位し、そのための理論を高校生に身につけさせるための環境を用意する、などの工夫が必要となる。特に②に関しては、すでに様々な取り組みがなされている。たとえば、東京学芸大学国語教育学会がまとめた『小学校・中学校・高等学校を見通した12年間の「文学」の学び⁴』というものがある。これは小学校・中学校・高等学校の12年間に關するもので、直接的に高大接続を視野に入れたものではないが、三十四頁にもわたる文学理論の用語やキーワードの解説がなされ、「レトリック」「語り」「テクスト」「コンテクスト」「視点」「時制」「文体」「メタ認知」「アイデンティティ」「空白」「人称」などが取り上げられている。この書を監修した千田洋幸は、「登場人物、物語、虚構、語り、構造、読者……等々、文学の学習のために必要な概念の習得は、入門期の段階ですでに始まっていると想定すること、未分化な状態に置かれていたそれらの概念が12年間をかけて発達していく過程として文学の学習を捉えること⁵」が重要であると説く。そして、「実は文学理論のコードの多くは低学年の段階ですすでに萌芽していると考えるべきなのです」と述べる。大学での文学教育を通じて学ぶような「文学理論のコード」を、小学校・中学校・高等学校の国語科教育に援用することの可能性が、ここで示されているのだ。

そうした先行する取り組みを踏まえた上で、本研究では、国語科における高大接続が有意義なものになるための別の道筋を考えてみたい。それは、③説明的な文章に示されている話題を発展的に理解する契機として文学的な文章（フィクション）に出会わせる回路を構築する、というものだ。こうしたことは実際の教育現場ではおそらく既になされており、珍しいものではない。しかし、「文学的な文章（フィクション）に出会わせる」ことを意識的に方法化し、そ

の方法を精緻なものにしていくことは必要であろう。そしてその方法化・精緻化の実践を蓄積させていくことも必要であるはずだ。以下に示すのは、その実践例の一つとなる。

二、研究テーマの設定

さて、いわゆる「思春期」に相当する中学生や高校生にとって、「自分は何者か?」「自分らしさとは何か?」といった問題は切実なものであるとされている。年齢を重ね、中学から高等学校へ、高等学校から大学へと進学する過程で、理想とする自分と現実の自分との葛藤に悩むことはあるだろう。そして、学校などで他人と出会い、自分自身で思い描く自己像と他人からの見られ方との葛藤に悩んだりしながら、「アイデンティティ」を構築しようとして成功したり失敗したりすることもあるだろう。そのような時期であるためか、高等学校国語科の教材として扱われる現代的な文章（とりわけ論理的な文章）においては、「私」や「アイデンティティ」は重要なテーマの一つとして挙げられている。思春期にあたる学習者（高校生）が「当事者意識」をもって向き合えるものとして、教材が選ばれているようである。

たとえば、必修教科目の「現代の国語」においては、宇野重規（『私』時代のデモクラシー）（『現代の国語』筑摩書房、『現代の国語』東京書籍）、阪本俊生（『私作り』とプライバシー）（『現代の国語』第一学習社）、若林幹夫「遅れてきた「私」」（『探求現代の国語』桐原書店）、仲正昌樹「私」が「主体」であるために」（『同前』、平田オリザ「わかりあえないことから」（『現代の国語』明治書院）など

がある。また、選択科目の「論理国語」においては、松村圭一郎「人はなぜ贈与するのか」（『論理国語』大修館書店）、鷺田清一「自他の「間あい」」（『論理国語』第一学習社）、森田良行「私」中心の日本語」（『同前』）などがある。さらに、「私」や「アイデンティティ」を規定する「多様性」というカテゴリーの教材として、管啓次郎「ビジンという生き方」（筑摩書房『論理国語』）、岡真理「虚ろなまなざし」（『同前』）などもある。

文学的な文章においても、「アイデンティティ」は重要なテーマであるとも言える。たとえば、定番教材として多くの教科書に掲載され続けてきた芥川龍之介「羅生門」は、前者は、飢え死にをするか盗人になるかを模索する中で、老婆との出会いを通じて当座の「私」の立場を決定する物語だと言える。また、同じく定番教材とされている中島敦「山月記」は、承認欲求と自己評価との不整合から「虎」としての「私」を引き受けることになる物語だと言えるだろう。

このことは学校で用いられる教科書だけでなく、問題集や参考書などにも見られることである。たとえば、『高校生のための現代文ガイド』²¹⁾では、一番最初の論点として「アイデンティティ」が掲げられ、岡田美智男「目玉ジャクシの原初的サッカーク」が取り上げられ、類似テーマとして若林幹夫「私」のつながりが取り上げられている。また、『読む力をつけるノンフィクション選』²²⁾中高校生のための文章読本に収められている幾つかの文章のうち、上橋菜穂子「物語ること、生きること」、伊藤亜紗「体、この不気味なもの」、オードリー・タン「ジェンダーから自由になる」などが、「アイデンティティ」に関連したものとして数えることができる。中山元「高校生のための評論文キーワード

100』においても、当然ながら「アイデンティティ」が立項されている。

そんな中で注目したいのが、小説家の平野啓一郎の書いた「分人」に関するエッセイだ。このエッセイはそれぞれタイトルを異にしながら、「本当の自分」幻想（『現代の国語』第一学習社）、「個人」から「分人」へ（『現代の国語』大修館書店）、「分人とは何か」（『精選論理国語』東京書籍）と、複数の教科書に掲載されている。出典は、第一学習社版『現代の国語』は、平野啓一郎『私とは何か「個人」から「分人」へ』（二〇一二年、講談社）であり、大修館書店版『現代の国語』は、岩波書店編集部編『これからどうする 未来のつくり方』（二〇一三年、岩波書店）所収の平野のエッセイ「個人」ではなく「分人」を基本単位としてである。しかし、出典は異なるが、それぞれの文章で示される平野の思考は、基本的に共通している。平野は、近代において形成された「（分割不可能な）個人 individual」とは異なるものとして「（分割可能な）分人 individual」なるものを想定し、一人の人間は唯一無二の「個人」として存在しているのではなく、諸々の対人関係に応じて生じる複数の「分人」によって構成されているという見通しを示した。この平野の文章が、複数の教科書に採用されているということは、「アイデンティティ」構築の当事者である現代の高校生にとって、平野の「分人」論が一定の意義を有していると見なされていることを意味する。

平野啓一郎は一九九九年に『日蝕』で第一二〇回芥川賞を受賞して以降、数多くの小説を執筆し発表してきたが、二〇一〇年前後より「分人」という概念を積極的に提起し始め、その自らの思考を導入した創作活動を展開した。その姿勢は『マチネの終わりに』（二〇一六年、毎日新聞出版）、『ある男』（二〇一八年、文藝春秋）、

『本心』（二〇二一年、文藝春秋）などの小説作品に見られるが、最も直接的に表れているのが、『空白を満たしなさい』（二〇一二年、講談社）である。

そこで次節では、高等学校教科書で教材として取り上げられる平野の文章を分析し、学習者にどのように読ませるものとしてそれが扱われているかを検証する。本稿では、平野の代表作である『私とは何か』を扱いたいため、第一学習社版の『現代の国語』（令和三年三月三〇日検定済）所収の平野啓一郎「本当の自分」幻想を対象にする。そして、高等学校国語科の教材から派生するものとして小説『空白を満たしなさい』に注目して分析を行い、前節で③として挙げた「説明的な文章に示されている話題を発展的に理解する契機として文学的な文章（フィクション）に出会わせるという回路を構築する」ための教材研究の実例を示すことにする。

三、教材研究の方向性（1）

——平野啓一郎『私とは何か』

平野啓一郎『私とは何か』は、既述のように二〇一二年に発表されたエッセイである。「個人」から「分人」へ」という副題からも分かるように、「私」なるものを理解する際に用いられてきた「個人」という概念に代わって「分人」という概念を推すという内容になっている。

第一学習社版の『現代の国語』では、平野のエッセイは「本当の自分」幻想」というタイトルで掲載されている。導入部に「学習のねらい」として、「主題に至る論の構造を把握し、主張に説得力を持たせるための論の展開について考える」（一九頁）と書かれて

いる。評論文を読解する技術の習得を目的とした上で、本文が提示されることになる。掲載されている本文は、『私とは何か』の三〇～三八頁を軸に、省略や加筆がなされている。

まず冒頭で、「インターネットが本格的に広がり始めた二〇〇〇年代初頭」（一九頁）の「私」の出来事が語られる。この文章を読む高校生はほとんどがまだ生まれていない頃の出来事である。「私」がある友人の書いたブログを読んだ際、「私の知っている彼とは全く別人」（一九頁）がそこに表れているように感じて驚いたことが語られる。そしてこのときの「ネットの中の彼が「本当」の姿と見えた」（二〇頁）という「私」の実感を発端に、「「本当の自分／ウソの自分」というモデル」（二〇頁）が自身の思考の前提にあったことを指摘し、「結局、どっちも「本当」なんじゃないのか?」（二〇頁）という問題意識に基づき、以下「私」自身が経験した具体例をも交えながら、「本当の自分」なるものを単一のものとして設定することの有害性について説くのである。

本文における様々な具体例に関する記述は、いずれも「主題に至る論」を「構造」化するものである。導入部に掲げられた「学習のねらい」が達成されるように、『私とは何か』が教材化されていると言えるだろう。その上で、本文の最後の部分に注目したい。この最後の部分は当然、筆者の「主張」として理解していいわけだが、同時にこの部分は、読者であり学習者である高校生へのメッセージとして通用するものともなっている。以下に引用する。

分人はすべて、「本当の自分」である。／私たちは、しかし、そう考えることができず、唯一無二の「本当の自分」という幻想に囚われてきたせいで、非常に多くの苦しみとプレッシャー

を受けてきた。どこにも実体がないにもかかわらず、それを知り、それを探さなければならぬと四六時中そのかざれている。私という人間は、対人関係ごとのいくつかの分人によって構成されている。そして、その人らしさ（個性）というものは、その複数の分人の構成比率によって決定される。分人の構成比率が変われば、当然、個性も変わる。個性とは、決して唯一不変のものではない。そして、他者の存在なしには、決して生じないものである。（二五頁）

この引用部分において、「私たち」という主体が設定されている。「私」と語る筆者と、読者であり学習者である高校生とが、「私たち」という語を通じて共同体を構成するよう仕掛けられる。まずこの場面で、文学理論の「語り」「語り手」というものを、学習者に意識づけることが求められよう。

語りによって立ち上げられた主体であるこの「私たち」の共同性は、「分人はすべて、「本当の自分」である」と考えることができずに、「唯一無二の「本当の自分」という幻想に囚われてきたせいで、非常に多くの苦しみとプレッシャーを受けてきた」という点にある。読者であり学習者である高校生は、「私たち」という語を通じて「非常に多くの苦しみとプレッシャーを受けてきた」主体となることを要請される。この要請を受けることができるか否かは、「私たち」と名指された高校生自身のこれまでの経験とそれへの実感に依拠するだろう。もちろん高校生は、この語りの要請を拒むことも可能ではある。しかし、その要請を受けるか拒むかを決断する前段階として、自身の経験とそれへの実感を確認するとき、それまで強く意識することのなかった「苦しみ」「プレッシャー」を自覚させられる

のではないか。……そういえば自分はあのときあんなプレッシャーを受けていた」、「……そういえば自分はあのとき「本当の自分」が何なのか分からずに苦しんでいた」と。この語りの働きによって「自己発見」のプロセスを経ることとなり、「私たち」という存在となつた高校生は、自らの「苦しみ」や「プレッシャー」から解放されることを求め、「分人」という考え方を人生の支えとして受容することになる。実際、この「分人」という考え方によって救われたと感じる学習者である高校生も少なくないだろう。

こうした語り（語り手）と学習者との関係の形成は、「主題に至る論の構造を把握し、主張に説得力を持たせるための論の展開について考える」ことを「学習のねらい」とする高等学校国語科という教科からすれば派生的なものであり、あるいは逸脱的なものであるかもしれない。しかし、既に第二節でも確認しているように、高等学校国語科の現代的な文章（とりわけ論理的な文章）の教材では、「私」や「アイデンティティ」は重要なテーマとされてきた。むしろ、思春期に相当する高校生自身が当事者として抱えている問題に向き合うことができるように、こうしたテーマの文章が教材として採用されているのではないか。第一学習社版『現代の国語』には、平野啓一郎が「分人」論を構築した意図を「評論のしるべ」というコーナーの中で次のように示しているが、それは平野の「分人」論を教材化した意図を仄めかすものともなっている。

青少年期を迎えると自我意識が強まる。自分とは何かという疑問を抱いたり自分探しをはじめたり、またその結論が見つからず苦悶したりする。平野は「個人」という概念を変えて「本当の自分」は一つではなく、対人関係ごとに見せる複数の顔が「本

当の自分」だとし、分人主義を主張したが、こうした「個人」を捉えようとする思考はほかにもある。（略）（二七頁）

ここで、「青少年期を迎えると自我意識が強まる。自分とは何かという疑問を抱いたり自分探しをはじめたり、またその結論が見つからず苦悶したりする」ことが、断定的な、いわば客観的事実として叙述されている。そのような「青少年」理解の下、彼ら彼女らが抱える「疑問」「苦悶」を解決する実践の一例として、平野の「分人」論が位置づけられている。「疑問」「苦悶」を抱えているならば「分人」という考え方があるのではないか、という読者であり学習者である高校生へのメッセージとして、本教材が置かれているのだ、ということである。

「唯一無二の「本当の自分」という幻想」に囚われずに済むことで精神的に楽になるということは、確かにあるだろう。対処療法的ではあるものの、「分人」という考え方に拠ることで、「苦しみ」や「プレッシャー」、「苦悶」から解放されるのであれば、国語科という教科の枠を超えて、人生において有意義な思考の場をこの文章が用意したことになるだろう。しかし、今まで「私たち」を捕捉していた「唯一無二」なるものへの信仰を捨てて、多なるものを抱えて生きていくことは、「私たち」にとつて難しくはないだろうか。「分人」なるものを想定することをする考え方の周辺には、どのような思考があるのだろうか。こうした問題に目を向けていくことは、おそらく国語科教材として平野の「分人」論を読む上でも有意義であるはずなのだが、高等学校のカリキュラムの下では対応することは難しいだろう。そこで求められるのが、高大接続あるいは高大連携を視野に入れた文学教育である。

平野は自身の「分人」論を、『私とは何か』というエッセイだけでなく、様々な小説の中に取り込んでいる。小説の登場人物に「分人」論を語らせ、その「分人」論に基づき自己認識を行わせ、そして登場人物が抱えている課題を解決させている。そうした小説の物語を読むことは、高等学校国語科の『現代の国語』や『論理国語』から発展した学習の契機となるし、授業者側にとっては教材研究の一途にもなる。この小説読解や物語分析の実践を、高等学校の国語科教育と大学での文学教育の間に置くことが望ましいことであろう。そこで次節では、平野の「分人」論が最も端的に表れていると見なしうる小説『空白を満たしなさい』を取り上げて、教材研究の方向性を指し示すことを目指したい。

四、教材研究の方向性(2)

——平野啓一郎『空白を満たしなさい』

平野啓一郎『空白を満たしなさい』は二〇一二年に講談社より刊行された小説である。初出は雑誌『モーニング』二〇一一年四〇号から二〇一二年三九号までの連載であり、二〇一五年に上下巻の分冊という形で文庫化された。また、二〇二二年にはNHKでテレビドラマ化されている。本文での引用は、二〇一二年刊行の単行本に拠る。

物語は、死んだはずなのに生き返ってきた男が、「自殺」した理由を探る中で、「分人」という考え方に会おうというものである。主人公の土屋徹生は、世界各地で死んだ人間がよみがえる「復生者」のニュースが報じられている中、三年前に死んだ復生者として生き返る。最初は徹生は、自分がどのように死んだかすぐには思い出せ

なかった。しかし、勤務先のビルの屋上から飛び降りて自殺したということを知らされ、愕然とする。自分には自殺するような理由など決していない、と思っていたからだ。そんな中、佐伯という人物の存在を思い出す。徹生は、憂さ晴らしのために鳩を蹴り殺していた佐伯を咎めたことがあり、それがきっかけで佐伯につきまとわれるようになっていた。自分が死ぬ直前に佐伯と会っていたことを思い出した徹生は、自分は佐伯によって殺されたのだと理解する。そして、自分は自殺ではないことを妻や周囲の人たちに語った。それにより、彼らが抱えてきた苦しみ(徹生の悩みを聞いてあげることができなかったことの後悔)も少しは和らげられた。しかしそれでも、徹生が自殺した後の世界⁴に戻ってきたことによって生じた違和感は簡単には拭い去られなかった。

そんな中、徹生の元に、自殺した当時の防犯カメラの映像が届くのである(送り主は佐伯であった)。映像は、徹生の自殺を示していた。その事実を受けとめることは徹生にとって苦しいことだった。しかし、復生者たちの集会で知り合ったボーランド人のラディックから、人間の生死に関わる考え方を示され、自殺という事実を少しずつ受けとめられるようになっていく。また、ラディックの紹介で、自殺願望者の人生をサポートするNPO法人の代表である池端と知り合う。池端は、表情の異なる複数のゴッホの自画像に言及しながら、「分人」という考え方を徹生に示した。「分人」という考え方は、最初は徹生にも理解しづらいものであった。しかし、この考え方に依拠することで、徹生は自分の自殺の理由を説明することができるようになる。

世界中で大きな騒動になった復生者の登場は、雇用問題や倫理問題などを引き起こしたが、今度はその復生者たちが急に消滅すると

ということが話題になり始めた。実際、徹生の知人たちも、姿を消していく。そして徹生も、家族に囲まれた穏やかな雰囲気の中で、その時を迎えようとしていた。以上が、『空白を満たしなさい』の物語内容になる。

この小説において「分人」が話題になるのは、主人公の土屋徹生と自殺願望者の人生をサポートするNPO法人の池端との会話においてであるが、徹生が池端の言葉のある程度理解することができたのは、その前段階としてラディックと対話を行ったことによる。

ラディックは火災から人を助けて命を落とした後に復生した人物であるが、死んだ理由が人命救助であったこともあり、周囲からは善人として理解されていた。しかし、そうした状況にラディック本人は違和感を覚えていた。ラディックは述べる。「土屋サン、私の死が、私の罪の数々を帳消しにし、私の人生を全面的に肯定するなんてことがないように、あなたの死が、あなたの行った素晴らしいことをすべて台なしにして、あなたの人生を全否定するなんて、そんなことは決してないのです。決してありません」「死は傲慢に、人生を染めます。私たちは、自分の人生を彩るための様々なインク壺を持っています。丹念にいろんな色を重ねていきます。たまたま、最後に倒してしまったインク壺の色が、全部を一色に染めてしまう。そんなことは、間違ってます。私の場合、それが、愚行ともつかない自己犠牲でした。土屋サンの場合は自殺でした。でもそれは、人間が生きている間にする、数え切れないほどの行為の、たかだか一つじゃないですか？」⁽¹⁰⁾。このラディックの言葉は、ラディック自身の生に対する認識の自己確認の成果であると同時に、死因が自殺であったことを知り衝撃を受けている徹生を慰めるものでもある。人間の生の価値が死に方（最後に倒してしまったインク壺の色）に

よって決定されることを否定するこの思考は、人生において「丹念にいろんな色を重ねて」いくことによる「私」の複数性というものに徹生の目を向けるものになる。

このラディックの言葉に対する理解をベースとして、徹生は池端の言葉を聞くことになる。池端はまず徹生に対して異なる二種類のゴッホの自画像を見せる。そして、「一方が本物で、他方がニセモノとは言えない。全部、本物のゴッホです」とした上で、「ゴッホだけじゃない、人間はみんなそうでしょう？ 裏表なんて言いますが、本当は二重人格どころか、つきあう人の数だけ幾つも顔を持っている。誰と喋っても『オレはオレ』のゴリ押しでは、コミュニケーションは成り立ちませんか？」と説明する。それでも「けど、……根は同じじゃないですか？ 僕は僕ですから。（略）……本当の自分、分はひとつですよ」と単一性に固執する徹生に対し、「私たちは、その対人関係ごとの色んな自分を、〈個人〉に対して〈分人〉と呼びます。分数の分到人。個人が整数だとすれば、分人は分数のイメージです。個人は一人、二人と数える。その一人々々の中にまた、複数の違った分人が存在している」「人間は、誰かとの関係の中で、その人のための分人を常に生み出している。お互いにです。相手の中には、あなたのための分人が生じる。一対のセットとして、言葉や感情のやりとりをしている。――個性というのは、だから、唯一不変の核のようなものじゃないんです。どういう比率で、どんな分人を抱えているかという、その全体のバランスです」と池端は述べるのだ。この池端の「分人」の説明は、平野啓一郎の『私とは何か』の叙述とかなりの部分で重なっている。

結果的に、池端の言葉を自分の中で吸収した徹生は、自身が自殺した理由を「分人」の概念を通じて説明することができるようにな

る。「僕を自殺させたのは、醜く間違った考えでした。僕は僕だ、という考え、僕という人間はただ一人、という考えです。もし僕が、分人という考え方さえ知ってたら、僕は千佳との分人、璃久との分人、秋吉さんとの分人を足場にしっかりと生きていきながら、そのたった一つのいやな分人を消し、さえずれば良かった！」¹⁶。つまり、「分人」という考え方を知らず、佐伯との関わりによって生じた「いやな分人」を消去するという考え方を知らなかったため、「佐伯の存在の影響は、僕全体の問題になってしまふ。そういう自分を否定しようとしたら、丸ごと全部、僕を否定しなきゃいけない」という考えに陥ってしまったのである。

『空白を満たしなさい』において、物語の主人公は最初は「分人」という考え方を知らなかったものの、様々な登場人物との対話や自問自答を通じて「分人」という考え方を知り、自殺を回避することが出来るかもしれない方法¹⁷を発見するのである。このような思考の過程がモデルとして示されることで、『空白を満たしなさい』という小説は、国語科教材としての平野啓一郎の「分人」論のテキストに対する理解を助ける副教材となる。そして、自殺を回避することが出来るかもしれない方法¹⁸を示唆しているという点で、これらの教材・副教材は、現実の様々な人間関係において生きづらさを感じている読者であり学習者である高校生のうちの誰かを救うものにもなり得るのである。

五、授業計画および発展的な学習の可能性

高等学校国語科教材としての平野啓一郎の「分人」論のテキスト

を「現代の国語」あるいは「論理国語」で扱う場合、授業時数としてはおそらく二時間もしくは三時間費やされることになるだろう（第一学習社の指導資料は確認できなかったが、東京書籍では二時間が配当されていた）。最初に教員による範読や語句の意味の確認などが行われ、「主題に至る論の構造を把握し、主張に説得力を持たせるための論の展開について考える」（第一学習社）などの、評論文を読解する際のポイントについての確認がなされるだろう。その後本文の内容確認や、授業者からの発問と学習者による応答がその内容の展開に応じて行われることになる。最終時限に発展的な学習として、「筆者の主張に対して賛成か、あるいは反対か、各自の考えたことを文章にまとめて発表し合おう」（第一学習社）というようなアクティブ・ラーニングを展開するとしても、そうした学習者の賛否の意見を相対化するような副教材の紹介を、高等学校の授業の中に組み込むことは時間的に困難であろう。なぜなら、副教材として『空白を満たしなさい』を読んで理解するだけでも一時限分は必要であろうし、副教材を読んだ後に、最初のテキストを読んだ後の自身の意見にどうフィードバックすることが出来るかを確認し、場合によっては発表し合うことにも一時限分は必要となるからだ。

その意味で、この「分人」論のテキストこそ、高大接続を視野に入れた教材として有効であると言えるだろう。

本論文の筆者は、椋山女学園大学国際コミュニケーション学部の「日本文学史（現代）」という授業において、「私」のあり方を様々な文学作品を通じて認識する目的で、二〇一四年度より『空白を満たしなさい』を教材として使用してきた。その際、対人関係を通じて形成される「私」の多様性を浮き彫りにするために、『空白を満たしなさい』の他に、米澤穂信『氷菓』¹⁹（他人に翻弄されることを

迷惑だと捉えながらも翻弄されたい願望を潜在化させた「私」、鴨志田一『青春ブタ野郎はバニーガール先輩の夢を見ない』(他人から観測されないこの世界に存在しないことになる「私」、森見登美彦『四畳半神話大系』(人間関係の形成に関わる無数の選択によって無数の「生」の可能性がありうる「私」、村田沙耶香『コンビニ人間』(環境によって最適化される「私」などを併せて取り上げた。こうした文学作品をとりあげつつ、『空白を満たしなさい』を扱った授業においては、以下のような課題を学生に取り組ませた。

課題 平野啓一郎の小説やエッセイの中で取り上げられている「分人」という考え方や前回の『四畳半神話大系』の「私」のあり方などを念頭に置きながら、「本当の私」というものに対して、あなたはどのように考えますか。そのあなたの考えを書いてください。(指定字数：一〇〇～五〇〇字)

この問いに対して毎年一〇〇～一五〇人ほどの受講生がそれぞれの考えを課題として提出している。「私は、『空白を満たしなさい』の「どの分人も表面的な飾りなんかじゃない、本物なんです」という言葉にひどく共感した」というような感想が書かれることもある。そんな中で受講生の考え方の傾向を見ていくと、およそ三つに分けることができる。一つは、「すべてが「本当の自分」である」という平野啓一郎の「分人」論に近い立場。次に、「本当の私」はすべての「私」ではなく、限定的に説明できるものである」とする立場。そして、「「本当の自分」は存在しないか、「本当」を知ることが困難だ」とする立場である。

たとえば、一つ目の立場の学生は、「私は「本当の私」というも

のについて、現代を生きる多くの人々の中には複数の「私」が存在し、そのすべてが「本当の私」であると考える。今回紹介された作品の池端による「分人」の考え方のように、異なる自分たちをどれも「本当の私」として受け入れることで、自身の一貫性という束縛から解放されるならば、現代人にとって非常に有意義な捉え方であると考えられる」と回答している。しかしこの学生は、「すべてを「本当の私」として受け入れるならば、結局は上手くいっていない自分自身も認めなければならぬ。自分が好きな「私」も嫌いな「私」も「本当の私」として向き合わなければならないという矛盾が生じ、葛藤に苦しまなければならない可能性もあると思う。すべての「本当の私」と、いつかは、誰しもが必ず向き合わなければならないだろう」とも述べており、平野の議論の先にある問題に触れようとしている。また、三つ目の立場だと、「本当の私」とは、自分でも自分以外の人でも、絶対に特定することの出来ない存在であると考ええる。人間は様々な出来事から無数の「生」の可能性が生まれ、その度に自分の理想像を思い浮かべ、その理想像に近づくような「私」を作っていく。そして、人間は完璧な理想の「私」にはなれないが、その過程で変化していく「私」こそ「本当の私」だと思う。しかし、これを自分で正確に特定することはできない」と回答した学生がいた。これも、平野の議論から逸脱していく思考を内包したものである。ちなみに、本段落で紹介した受講生の回答はいずれも二〇二二年二月一九日実施の授業の参加者のものである。

なお、二〇二二年度は、授業で『空白を満たしなさい』を扱った翌週に、村田沙耶香『コンビニ人間』を取り上げる授業を行った(二〇二二年二月二六日)。「コンビニ人間」はコンビニエンスストアでの労働に最適化された主人公が描かれたが、彼女はコンビニ

でしか人間関係を構築していないため、コンビニにおける「分人」以外の「分人」を形成することがない。一応恋人を作り同居生活をするのだが、恋人との関係による「分人」というものをうまく形成することはできず、コンビニにおける「分人」が主人公を支配してしまう。平野啓一郎の「分人」論は、様々な人間関係を持つことのできる人を念頭に置いた論であったと言えるが、そもそも多様な人間関係を形成することができない人は、平野の「分人」論をどう受けとめることができるのだろうか。これも、教材を超える問題であると言える。

発展的な学習の一環として、教材として示された文章を相対化するためには、もちろん学習者の経験とそれに基づく実感も重要であるが、その文章をより深く理解するための副教材と、同じテーマを扱いながらも異なる視点を提示する副教材が重要である。そうした副教材との出会いの場を、既存の高等学校のカリキュラムの中だけで用意することは非常に困難だ。その意味でも、高大接続を視野に入れた文学教育を有意義なものとして設計する必要がある。

六、まとめ

本論文では、高大接続を視野に入れた文学教育の可能性を確認することを旨として、多くの出版社の国語教科書に教材として採用されている平野啓一郎の「分人」論に注目した。平野の「分人」論が学習者である高校生に対してどのように読まれるものとして置かれているかを確認した上で、学習者の理解を深化させたりあるいは相対化させたりする契機となり得るものとして、平野の小説『空白

を満たしなさい』を取り上げ、『空白を満たしなさい』を教材とする大学での文学教育の実践例を紹介しながら、高等学校での発展的な学習をさらに発展させる環境として、高大接続の可能性を指摘した。

今回は「私」「アイデンティティ」というテーマに絞って高大接続について考えたが、高等学校国語科の特に説明的な文章(評論文、論説文、「論理国語」などで扱われる文章)で扱われるテーマは他にもまだある。「言語」「身体」「メディア」「社会」「境界」などが挙げられるであろうし、「アイデンティティ」についても具体的な事例に則してもっと問題を細分化することも可能である(「ジェンダー」や「セクシュアリティ」や「人種/民族」など)。当然、「アイデンティティ」にせよ「言語」「身体」「メディア」にせよ、大学教育における文学・哲学・歴史学・人類学・社会学などで論じ続けられている。こうした大学の知の成果を還元する意味でも、高大接続の可能性は引き続き探られるべきである。

注

- (1) 文部科学省HP https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/ioushin/991201b.htm (最終確認: 二〇二三年九月一日)
- (2) 同前(最終確認: 二〇二三年九月一日)
- (3) Gombuchi Nontsugu (五味典嗣)「高等学校国語科が大きく変えられよう」といいます(一)」<https://note.com/gombuchi/nl772700fda5a> (投稿: 二〇一八年八月二十四日、最終確認: 二〇二三年九月二日)
- (4) 千田洋幸・木下ひさし(監修)、笹平真之介・渡邊裕・今村行(編)、東京学芸大学国語教育学会(著)『小学校・中学校・高等学校を見

- 通した12年間の「文学」の学び』（二〇二三年、東洋館出版社）
- (5) 千田洋幸「『持続する文学の学び』を作り出すための観点」（千田洋幸・木下ひさし前掲書）、二〇頁。
- (6) 同上、二〇頁。
- (7) 五味渕典嗣・松田顕子・吉田光（編）『高校生のための現代文ガイダンス ちくま評論文の論点21』（二〇二〇年、筑摩書房）
- (8) 澤田英輔・仲島ひとみ・森大徳（編）『読む力をつけるノンフィクション選』中高生のための文章読本』（二〇二二年、筑摩書房）
- (9) 中山元『高校生のための評論文キーワード100』（二〇〇五年、筑摩書房）。当該書はキーワードを五〇音順に並べていることもあり、「アイデンティティ」は最初に立項されている（一六―一七頁）。
- (10) 平野啓一郎『空白を満たしなさい』（二〇一二年、講談社）、三〇二―三〇三頁、傍点原文。
- (11) 同前、三二四頁。
- (12) 同前、三二四頁。
- (13) 同前、三二六頁、傍点原文。
- (14) 同前、三二六頁。
- (15) 同前、三二七頁。
- (16) 同前、三九四頁、傍点原文。
- (17) 同前、三九四頁。
- (18) 米澤穂信『氷菓』（二〇〇一年、KADOKAWA・角川スニーカー文庫）
- (19) 鴨志田一『青春ブタ野郎はバニーガール先輩の夢を見ない』（二〇一四年、KADOKAWA・電撃文庫）
- (20) 森見登美彦『四畳半神話大系』（二〇〇五年、太田出版）
- (21) 村田沙耶香『コンビニ人間』（二〇一六年、文藝春秋）